

なかま

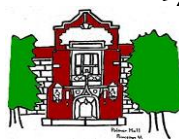
第2ステージ開始

夏休みが終わりました。児童・生徒の皆さんには日本への帰国経験や、アメリカ国内でのサマーキャンプ等、たくさん思い出と、皆さんを一回りも二回りも大きくしてくれる経験に巡り合ってきたことと思います。第2ステージ（旧2学期をこう呼ばせていただきます。）には様々な行事が予定されています。保護者の皆様には行事へのご協力をいただくことでご苦労をおかけいたしますが、よろしくお願ひいたします。新たに13名の児童・生徒を迎えるのスタートです。児童・生徒の皆さんにとって、新しい仲間を思いやることも本校で学ぶ心得のひとつです。仲良く、充実の第2ステージとなるよう、頑張っていきましょう。現地校との兼ね合いには大変な苦労と努力が求められることになるでしょうが「継続は力なり」。ここまで頑張り続けてきたことへの自信と誇りをもって、実り多いステージとしていきましょう。先日、テレビである企業のCEOが、こんなことを言っていました。「難しいと思うことは挑戦してみる。・・・だって、結局は、それは出来ることなのだから・・・」私自身もこの言葉を励みとして、頑張っていきたいと思ひます。

先生方の異動について

- ◆プリンスコース小学部のマホラン先生の退職に伴い、新しく鷺尾幸子先生が仲間に加わり、担当となります。ご挨拶を掲載しました。よろしくお願ひします。
- ◆プリンスコース副担任でご活躍いただいたブレミング先生の休職に伴い、代わりにJASLコースの比嘉美佐子先生が担当することになりました。よろしくお願ひします。

皆さんこんにちは。鷺尾幸子と申します。長男の幸一が桜組に入学したばかりで、自分もプリンスコース小学部の担任として今学期より就任いたしました。マホラン先生の後任ということで、突然のことでしたが、いずれは日本語学校で教えてみたいと思っていましたので、いい機会だと思っております。自分は大学生、大学院生、および医学部・看護学部系の大人を相手に教鞭を振ったことは何度もありますが、日本語学校で子供たちを相手に担任として教えるのはこれが初めてです。したがって、それを専門としていたマホラン先生の後に続く者として、かなりのプレッシャーがかかっています。できる範囲でがんばりますので、応援のほうよろしくお願ひします。（鷺尾幸子）



プリンストン日本語学校

平成27年度 No.13

平成27年 8月16日

文責 荒川雄之 arakawa@pcjls.org

お知らせ

- 8月16日 夏休み明け授業再開
- 8月23日 総務オフィサーミーティング
創立35周年記念Tシャツ申込締切
- 9月5日 土曜授業日（選択算数・数学なし）
第3回冷泉彰彦氏講演会
クラス委員全体ミーティング（14:45～）
授業研究（中学部3年）
- 9月13日・20日 運動会リハーサル①②

ヒロシマの証言者:大橋敏文氏の逝去

広島市の被爆者としてプリンストン日本語学校で体験談をお話し下さった大橋敏文氏が、被爆から70年目にあたる8月6日に当地で逝去されました。大橋氏は、学校創立者の一人である小野咲子さんのお父様で、第二次大戦末期に海軍士官として、海軍最大の兵器工場といわれた呉の工廠に勤務され、戦艦「大和」に使われた特殊鋼



本校生徒と大橋氏 右から4人目

板の開発にも従事された方です。運命の8月6日には原爆投下の1時間後に軍の指令で広島市内に入り、中心部の惨禍をつぶさに見て帰還されましたが、この入市被爆によって健康を損ない、数日間生死の境をさまよわれました。一命を取りとめ、技術者として復帰し、20年後に襲ってきた食道がんも克服されて、晩年は神奈川県平塚市で静かな毎日を送っておられましたが、15年ほど前から夏をプリンストンで過ごすようになり、原爆の被害を知らない若い人にご自身の体験を伝えることを使命とされました。広島高女出身で、原爆で多くの後輩を亡くされた奥様も常に同行されました。当校では2009年にプリンスコースの山田級とモイヤー級で話を下され、身をもって語られる被爆の実態に、生徒の一人一人が大きなインパクトを受けました。「大戦という極限状態で最強の武器の使用を押さえることは難しい。だからこそ戦争を始めてはいけない」という大橋さんの言葉は今も胸に響きます。92歳の果敢な生涯に哀悼の意を表し、皆様にお知らせします。（理事:カルダー淑子）

◆昨日は終戦記念日。大橋様のご貢献に感謝し、ご冥福をお祈りいたしますとともに、本校、そして地球社会の小さななかまである子どもたちに、平和への思いが育っていくことを願ってやみません。